温かいスープ(1)

今道 友信

(一九五七年、筆者はフランスのパリで大学の講師を務めていました。筆者は毎土曜ある小さなレストランで夕食を取っており、しばらくするとそのレストランを切り盛りする母親と娘の二人と顔なじみになりました。)

若い非常勤講師の月給は安いから、月末になると外国人の私は金詰まりの状態になる。そこで月末の土曜の夜は、スープもサラダも肉類も取らず、①「今日は食欲がない。」などとよけいなことを言ったうえで、いちばん値の張らないオムレツだけを注文して済ませた。それにはパンが一人分付いてくるのが習慣である。そういう注文が何回かあって気づいたのであろう、この若い外国生まれの学者は月末になると苦労しているのではなかろうか、と。

(中略　二月のある日、筆者はいつものようにレストランに行きました。)

その夜は雹が降った。私は例によって無理に明るい顔をしてオムレツだけを注文して、待つ間、本を読み始めた。店には二組の客があったが、それぞれ大きな温かそうな肉料理を食べていた。そのときである。背のやや曲がったお母さんのほうが、湯気の立つスープを持って私のテーブルに近寄り、震える手でそれを差し出しながら、小声で、「お客様の注文を取り違えて、余ってしまいました。よろしかったら召しあがってくださいませんか。」と言い、優しい瞳でこちらを見ている。小さな店だから、今、お客の注文を間違えたのではないことぐらい、私にはよくわかる。

こうして、目の前に、どっしりしたオニオングラタンのスープが置かれた。寒くてひもじかった私に、それはどんなにありがたかったことか。涙がスープの中に落ちるのを気取られぬよう、②一さじ一さじかむようにして味わった。フランスでもつらいめに遭ったことはあるが、この人たちのさりげない親切のゆえに、私がフランスを嫌いになることはないだろう。いや、そればかりではない、人類に絶望することはないと思う。

国際性、国際性とやかましく言われているが、その基本は、流れるような外国語の能力やきらびやかな学芸の才気や事業のスケールの大きさなのではない。それは、相手の立場を思いやる優しさ、お互いが人類の仲間であるという自覚なのである。その典型になるのが、名もない行きずりの外国人の私に、口ごもり恥じらいながら示してくれたあの人たちの無償の愛である。求めるところのない隣人愛としての人類愛、これこそが国際性の基調である。そうであるとすれば、一人一人の平凡な日常の中で、それは試されているのだ。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①『今日は食欲がない。』などとよけいなことを言ったうえで」とあるが、なぜこのようなことを言ったのか。適当なものを選びなさい。

ア　金詰まりでオムレツだけを注文していることが恥ずかしく、気づかれたくなかったから。

イ　オムレツにはパンが一人分付いてくるので、それ以外を注文しても食べきれないから。

ウ　月末は食欲がわかないほど苦労することが多く、不機嫌になってしまっていたから。

〔　　〕

(2) ——線②「一さじ一さじかむようにして味わった」とあるが、このときの筆者の様子として適当なものを選びなさい。

ア　「お母さん」がスープを持ってきたことに驚き、本当に注文が間違っていたのか疑問に思っている。

イ　温かいオニオングラタンのスープに心を奪われ、思いがけない料理に涙が出るほど夢中になっている。

ウ　スープを食べさせてあげようとする「お母さん」の気遣いに心を打たれ、その思いをかみしめている。

〔　　〕

(3) 筆者が考える国際性の基調とは何か。本文中から十九字で探し、最初と最後の三字を書きぬきなさい。

□□□ ～ □□□